10/28 福井

貧困に苦しむ大学生らが意見を交わしたパネル討論＝27日、福井市の県国際交流会館（写真は一部加工）

貧困窮状 学生ら訴え

福井で討論 「毎日バイト 通学諦め」

貧困と格差の解消に向けた「反貧困キャラバン2018」（福井新聞社後援）は27日、福井市の県国際交流会館で開かれた。若者の貧困をテーマにしたパネル討論に、貧困家庭に育った大学生が登壇。毎日アルバイトに追われる生活で中退せざるを得なくなった窮状を訴えた。

福井弁護士会などでつくる実行委員会が開き、約70人が来場。県内外の20代男女4人がパネリストを務めた。

貧困問題の当事者として登壇した県外の男子大学生は、幼少期に両親が離婚。母の再婚相手から虐待を受け、昼と夜の食事は500円を与えられただけだった。小2で児童相談所に預けられ、小4で里親に引き取られた。大学進学後に独立し、里親に借りた入学金の返済、学費や生活費のために月15万円の収入が必要だという。

男子大学生は「週7日のバイトで休む時間がない。（時給の高い）深夜のバイトを優先したら、大学の出席率が落ちて全単位を落とした」と苦しい生活を吐露。「奨学金の額を上げると将来の借金になる。通学を諦めるしか道がない」と語り、来春の中退を決断したと打ち明けた。

越前市で子どもたちの好奇心を伸ばす探究型学習塾「ハルキャンパス」を運営する森一貴さんは、「貧困の連鎖を自己責任論に持ち込む風潮がいまだにあるが、社会全体で考えていかないといけない」と指摘した。

学費無償化を求める運動に取り組む京都府の大学生橋川真吾さんは「借金を抱える学生は当たり前にいる」と報告。浜松市の若者グループの判治佳穂さんは、就職後も「奨学金を返し続けるために、転職するリスクを負えなくなる」と訴えた。

（細川善弘）